

外務大臣賞

咲かせるために、小さな一歩を

桐蔭学園高等学校 2年

鈴木 華子

自分はなんて小さい存在なのだろうと悔しく思うときがある。

横浜で開催された「第七回アフリカ開発会議」に合わせて、学校でニジュールの現状についての新聞記事が配られた。その国では私たちと同年代の男の子が、保護者に他の国で物乞いをさせられている。四人の子どもを抱えてアルジェリアに渡ろうとしたものの砂漠に置き去りにされた女性が、自分の尿を子どもたちに飲ませながら生きながらえた。最初は読むことを躊躇していた同級生も、時間が経つにつれ静かになっていく。私たちが勉強している間も、友達と遊んでいる間も、貧困に喘ぐ人は数多く存在している。知識上では理解していたはずの現実を目の前に尽きつけられ、私たちは愕然とした。

新聞上の男の子の目が忘れられず、ニジュールの状況について調べた。二〇一八年時点で人間開発指数は世界最下位であり、食糧危機により子どもが続々と学校を退学し、仕事を探しに行かなければならない状況だ。労働環境も良いとは言えず、子どもにはきつい仕事ばかりである。ニジュールでは、一日一・二五ドル未満で生活する国民が全人口の四十四%に達している。紙面越しに見る、同年代の子どもたちを笑顔にしたい。そう決意したものの、先程のデータから計算すると九四五万人もの人々が貧困に苦しんでいるのである。その途方もない数字に啞然とし、自分の力と比べてしまった。私はどんなに小さい存在なのかと思い知らされた。

それでも、私は彼らに何ができるのだろうかと考え続けた。募金や現地でのボランティア、様々な支援の形がある。どうやって助け合うことができるのだろうかと考えていたそのとき、ふとある記事が目にとまった。「ノヴィーニエ子ども食堂」の紹介記事だ。そこでは、月に一回、地域の子どもに対して無償で食事が提供されている。ガーナ出身のトニー・ジャスティスさんが開くこの食堂は、どんな子どもでも参加できる。トニーさんは元々、アフリカでストリートチルドレンを保護していたが、日本でも十分に食事ができず、一人で食事をする孤食の子どもの多いことを知り、日本で子ども食堂を開いているのだという。私はハッと気付いた。世界には辛い思いをしている人たちが数え切れない程いる。しかし、その人たちを実際に見てきた方も助けたいと思う人々が、身近に存在するのである。顕在化されにくい日本の子どもたちの貧困、それを、アフリカの子どもたちの貧困を見てきた方には見えているのだ。

私はトニーさんに連絡をし、ボランティアとしてノヴィーニエ子ども食堂を手伝った。食堂と併に開かれている寺子屋では、文化を教え合っていたり勉強をしたりしている。その場所では、皆が家族だった。温かい雰囲気にも包み込まれ、居心地が良い。配膳を手伝うと「ありがとう！」と女の子が私に微笑みかけた。そのふとした瞬間、さりげない言葉に私は胸を突かれた。私が、ニジュールについての記事を読み、力になりたい、この子たちの笑顔を見たいと思い想像していた笑顔が、彼女の顔に咲いていたのである。背伸びはしなくても良いのだ。と思った。身近なところから一歩ずつ、しっかりと。それこそが、世界の未来をより良くするための、私にとっての一番の支援なの

だと気付いた瞬間だった。

次は、自分から勇気を持って行動を起こすときだ。私は、「こども食堂」という言葉を誰もが知っている言葉にしたいと思う。自分の家族や町、国、そして世界に広め、世界中に笑顔を咲かせたい。確かに、自分は小さい存在かもしれない。しかし、その自分が勇気と一緒に踏み出す一歩で世界は少しずつ良くなるのだ。大きく息を吸う。まだ先の見えない真っ暗な道に向かって、私は一歩を踏み出した。小さく、ゆっくりと、しかし確実に。